【VOCALOID】リンが歌えなくなった日

ピーナッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【ＶＯＣＡＬＯＩＤ】リンが歌えなくなった日

【Ｎコード】
Ｎ５０９１ＢＡ

【作者名】
ピーナッツ

【あらすじ】
ボカロ系二次ではかなり本気で書いた小説です。
読んでみて下さい。

宵の口から土砂降りの雨を降らせていた雨雲が、深夜を過ぎると雷を落とし始めた。
地が裂けたかと思うような雷鳴が鳴り響き、ミクは目を覚ました。
彼女は普段子供のように眠りが深く、滅多に夜中に眼を覚ますことはない。

あたしが起きるくらいだから相当近いわね…。まあいいや、寝よ…。
再び枕に顔をうずめる。しかし、すぐに肩を揺すられて夢の世界から連れ戻された。

「…ミク姉、ミク姉」

顔を上げ目をこする。リンだった。大きな枕を抱いている。

「…リン？　何？　こんな夜中に……」

「…雷、怖いの……」

何言ってんの、子供じゃあるまいし――。
そう言おうとしたとき、稲妻が部屋を白く染めた。
ひどく怯えたリンの顔が、一瞬闇に浮かび上がる。
間を置かずに、窓ガラスが震えるほどの雷鳴が轟いた。
リンは悲鳴を上げて耳を塞いだ。抱いていた枕を取り落とす。

「リン、おいで」

ミクは布団をめくり、リンを招いた。
リンは枕を拾うと飛び込むようにベッドにもぐり込んだ。
両手で耳を塞ぎ、ミクの胸に顔をうずめる。
ミクはリンの背に手を回して抱きしめた。

「大丈夫よ、怖くないから」

リンは、ボーカロイドとしての人気に水をあけられているミクに強い対抗心を抱いている。
だからリンは、ルカに甘えてもミクには甘えようとしない。
ミクは、リンが雷を怖がることを知らなかった。
きっとこれまで、嵐の夜はルカの部屋に逃げ込んでいたに違いない。
今日ルカはＣＤ製作のスタッフに誘われて飲みに出かけている。
ルカがいないからって、あたしのとこに来るなんて、よっぽど怖かったのね…。

ミクはリンが寝付くまで背を撫で続けた。

☆

翌朝、昨夜の雨が嘘のように、空は晴れわたっていた。
午前様のルカが、寝不足の目をこすりながら朝食を用意する。

四人揃ってテーブルにつくが、今日は会話が少ない。
いつも一番喋るリンは、昨日ミクに弱いところを見せたことを気にして黙っている。
ミクはリンのプライドの高さを知っているから、昨夜のことを話題にしたりしない。
二人がギクシャクしていることにルカとレンは気付いていたが、と

りあえずそっとしておこうと思っていた。

☆

朝食の後は、みんなでレッスンルームに集まった。
一週間後に札幌市内で大きなライブがあるのだ。
公演の二日前からは本番さながらのリハが始まるので、曲のアレンジやダンスの振り付けを今で叩き込んでおかなくてはならない。

「この後あたしいなくなるから、次リンがリフトで登場ね」

レッスンルームをステージに見立て、セットリストと演出を確認する。
リンが自分のソロ一曲目の歌を歌う。
伸びやかで澄んだ歌声がレッスンルームに響き渡る。
その時だった。曲の途中で突然大音量のノイズが走った。
それはほんの一瞬だったが、耳障りで背筋が寒くなるような音だった。
四人は一斉にビクッと肩をすくめた。

「うえー。何、今のノイズ？　鳥肌立っちゃった」

レンの腕の産毛が逆立っている。

「変ね、うちの機材、ノイズなんて出たことないのに……」

ルカが首をかしげてミキサーをチェックする。
彼らはクリプトンのドル箱なので、高級な音響機器を惜しみなく与えられている。

「…い、今の…あたしだ…」
震える声でリンが言った。他の三人がハッとして彼女に目をやる。
リンの顔は驚くほど真っ青になっていた。
「リ、リン、そんなはずないじゃない。あなたの声にノイズなんか…」
ルカがそう言ったが、確かに機器の不良ではない気がしていた。
「自分で、分かるの…。何で？　何であたしの声…」
「リン、もう一度歌って。最初から」
ミクがコンソールを操作して曲のオケを流す。
リンは躊躇いの表情を見せていたが、曲が歌詞にかかるとボーカロイドの本能で歌いだした。
さっきのことがあったのでいつもの突き抜けたような元気さはないが、普段と変わらない澄んだ声――そう思った矢先、同じノイズが空気を引き裂いた。
愕然とするリン。ルカとレンが心配そうに見つめる。
「…何で？　どうして…あ、あたし…ジッ…」
とうとう普通に話している時にもノイズが入るようになった。
「…あたジッ…しの声ジッ…う、ジッ…歌が…」
糸の切れた操り人形のように、リンが床にへたり込む。
ルカが駆け寄り、呆然としているリンの肩を抱く。

「リン！　大丈夫よ！　こんなの、クリプトンに行って診てもらえば、すぐに…」

「クリプトンじゃダメよ。剣持さんでなきゃ」

ミクが携帯で電話をかける。
剣持とはヤマハのボーカロイド開発責任者、剣持秀紀のことである。
ボーカロイドの礎となる基本技術を一から開発し、「ボカロの父」と呼ばれている人物だ。
普段は静岡県のヤマハ豊岡工場にいる。
ミクは彼の携帯番号を知っていて、直で電話をかけている。

「あ、剣持さんですか？　ミクです。はい、元気なんですけど、ごめんなさい急ぎのお話なんです。リンの声が…」

ミクは事細かにリンの症状を伝えた。
リンがそれを判決を言い渡される被告のような顔で聞いている。
残酷だが、この際仕方がない。
剣持の指示を聞き終わると、ミクは通話を切った。

「リン、剣持さんとこに行くわよ。チケットはヤマハで手配しとくから、すぐ千歳空港に向かってって」

いい終わるとすぐに電話を掛け直し、タクシーを呼ぶ。
うろたえるばかりのルカとレンとは対照的な手際の良さだ。
ミクは普段のほほんとしているのだが、緊急時には突然器量を発揮することがある。

「さ、行くわよ」

ミクがリンの手を引く。ルカが慌てて止めた。
「ちょ、ちょっと、ミク。いくらなんでも手ぶらで静岡へ行く気？」
「要る物があれば向こうで買うわよ」
「日帰りできないの分かってるんだから着替えくらい…ちょ、ちょっと待っててよ！」
ルカは慌てて着替えや身の回りのものをバッグに詰め込み、ミクに持たせた。
ミクとリンがタクシーに乗る。
「新千歳空港まで」
行き先を告げると運転手は二万円近くかかりますよと言った。
ミクは「急いで」とだけ答えた。
タクシーで空港に向かっている最中に、ヤマハからミクへ電話があった。
チケットが無事取れたそうだ。
運転手からボールペンを借り、予約した便の時刻と予約番号をメモする。

☆

ヤマハも心得たもので、予約してあったのは本当にギリギリ間に合うような時刻の便だった。
飛行機の座席はプレミアムクラスで、ちょうど二人の席が独立して並んでいた。

ヤマハの社員が気を使って席を取ってくれたのだろう。
二人が並んでシートに腰掛ける。
席に着くとミクは、ふう、と息をついた。
札幌からここまで慌しかったが、羽田までの二時間は座っているだけだ。
ここまで黙ってミクについてきたリンの顔を見ると、相変わらず青ざめて、死んでしまいそうな顔をしている。

「ヤマハの人が羽田に迎えに来てくれるって。夕方には静岡につけるからね」

努めて穏やかな声で、ミクは言った。

「…ミク姉ジッ…」

レッスンルームを出てから、はじめてリンは喋った。
ノイズを気にしてか、消え入りそうなほど小さな声だった。

「リン、無理に喋らなくてもいいよ」

「…あたジッ…し、歌えなジッ…くなったりしたら…どうジッ…すれば…」

言葉にすることで抑えていた思いがあふれてきたのだろう。
リンの眼からぽろぽろと涙がこぼれた。

「リン、心配ないから、泣かないで」

「…あジッ…たしには…歌しか…うたジッ…えなくなったら、ジッ…もう、何も…」

ミクがリンの手をぎゅっと握る。

「大丈夫、剣持さんが必ず直してくれるから」

「必ずなんジッ…て、どうして分かジッ…るのよ！」

ミクの手を払いのけ、振り絞るような声でリンは言った。
ときおり混じるノイズが痛々しい。

「ミク姉にジッ…は、あたしの気持ちなジッ…んて…どうせ人ごとジッ…としか…」

うつむいてすすり泣くリン。素足の太腿の上に幾つもの涙が粒となって落ちる。

「リン…」

ミクは震える背中を悲しそうに見つめた。
歌えなくなるかもしれないという恐怖で、リンは貝のように心を閉じている。
誰もがかける言葉を失ってしまうだろう。
だが、ミクは唇をキュッと結び、リンの肩をつかんで身体を起き上がらせた。

「リン、あたしの眼を見て」

「嫌！」

リンが俯いたまま頭を振って拒否する。

「リン、あたしの眼を見て！」

さっきよりも強い声で、ミクはもう一度言った。
毅然とした声に何かを感じ取り、顔を上げて眼を合わせる。
リンはハッとした。
ミクの眼は静かで、真っ直ぐだった。嘘やへつらいとは無縁な、澄んだ瞳だ。

「リン、あなたは、何よりも大切な、あたしの妹よ」

ひとことずつ言い含めるように、ゆっくりと話す。

「だから信じて。あたしは嘘なんかつかない。剣持さんなら直せる、本当よ」

穏やかだが、限りない力強さを込めて、ミクは言った。
その言葉は、頑なになっていたリンの心にも染みこんでいった。

「…信じてくれる？」

リンはこくりと小さく頷いた。
ミクが聖母マリアのような優しい笑みを浮かべ、リンの頭を撫でる。

「いい子ね、リン。愛してるわ」

照れもせずにミクは言った。リンの胸がキュンと音を立てる。

泣きやんだリンは、羽田に着くまでおとなしく座っていた。
心を締め付けていた不安が消え去ったわけではない。

それでも、胸に宿った温かいものが、彼女の気持ちを落ち着かせていた。

（…あたし、いつもミク姉に突っかかってばかりなのに…）

隣を見ると、いつの間にかミクは眠っていた。
昨夜の雷で、二人とも睡眠不足である。
安らかなミクの寝顔を見ていたら、リンも眠気が差してきた。
身体をシートに預け、眼を閉じる。

（…ミク姉は、どうしてあんなに確信が持てるんだろう…）

リンはそんなことを考えていたが、間もなく深い眠りの淵へ落ちていった。

☆

羽田空港でヤマハ東京支社の社員と合流し、静岡県磐田市の豊岡工場に着いたのは午後四時だった。
剣持がいるのは工場内にあるサウンドテクノロジー開発センターだ。
四階建ての立派な社屋。玄関前にタクシーを横付けする。
若い男性の社員がミク達を出迎えた。

「遠いところからお疲れ様でした。早速ですが、ボーカロイド開発ルームにご案内いたします」

長い廊下を歩き、開発ルームへ向かう。静かな廊下に、早足の足音が反響する。
リンの胸には再び不安が芽生えてきていた。
案内した社員が、開発ルームのドアを開ける。中には誰もいなかっ

た。

開発ルームはレコーディングルームのような間取りになっている。音響関係のコンソールとハイスペックのコンピュータが並び、大きなガラス窓を隔てた隣にはレコーディング用の防音室がある。壁や床はライトブラウンの板張りで、落ち着いた雰囲気だ。

「アレ？　剣持主任は…」

若い社員がキョロキョロしていると、後ろから声をかけられた。

「ミク、リン、久し振り」

振り向くと剣持が缶コーヒーを飲みながら立っていた。
ジーンズにTシャツとラフな服装に、茶色に染めた髪。
エンジニアというより、ミュージシャンといった感じの風体だ。
彼の顔を見てミクはホッとした。
ミクは剣持の髪の色が好きだ。
研究者には似つかわしくないとも思える明るい茶色の髪には、音楽業界で最先端テクノロジーをリードして生きていくのだという気概がうかがえるのだ。

はいよ、と言ってミクとリンに紙パックの緑の野菜ジュースを手渡す。
これを買いに行っていたらしい。
連れてきた社員は返し、剣持とミク、リンの三人で打ち合わせ用のテーブルにつく。

「遠いとこから来て疲れてるだろうけど、早速本題に入ろう。ノイズが出たときの状況、もう一度詳しく教えてくれるかな」

できるだけ詳しく話すミク。
リンは隣でおとなしく座っているが、少し不安げな表情だ。
「…うん、状況は分かった。じゃあリン、隣に入ってもらえるかい」
リンはレコーディングルームに目をやった。
大きな窓越しにマイクスタンドが見える。
レコーディングは慣れているのだが、今日はマイクが恐ろしく感じられた。
「剣持さん、あたしも一緒に入っていいですか？」
リンの怯えを感じ取ったミクがそう聞いたが、剣持は控えてくれ、と言った。
一人でマイクの前に立つリン。
青ざめた顔をしているが、ミクにはガラスの向こうで見守ることしかできない。
「リン、何でもいいから喋ってみて。…何でもって言ったらやりにくいか。そこにある『レコーディングルーム使用時の注意』って紙読み上げてみて」
剣持の声がスピーカを通して防音室に流れる。
リンは飛行機の中で喋ったのが最後で、ここまで声を出していない。
唇を噛んでなかなか喋ろうとしないが、剣持とミクは辛抱強く待った。
覚悟を決めたリンが、スッと息を吸って、喋り始めた。
「マイクのジッ…電源をいジッ…れる際は、コンソージッ…ルのボ

リュージッ…ムが最小に…」

悲しそうな顔で喋るリン。ときおり混じるノイズに胸が痛む。
剣持はモニターに映し出される波形をじっと見つめていた。
彼の頭の中ではリンの声が発音記号に分解され、精緻な分析が行われているのだ。
数行を読み上げたところで、剣持がもういいよと言った。
リンが息をつく。ボーカロイドにとって、ノイズ交じりの声で喋るのはかなりの苦痛である。

「次は歌ってもらうよ。音域が広い曲がいいから。――を歌ってくれるかい」

剣持が曲名を言うと、リンはビクッと肩を震わした。
今朝のレッスンルームでのノイズを思い出したのだろう。

「ＢＧＭがあると邪魔だから、悪いけどアカペラで頼むよ」

マイクを前にためらうリン。ちらりとミクを見る。
ミクは頷いて、歌うように促した。

氷の張った湖を歩くように、こわごわとリンが歌いだす。
一小節歌いきらないうちに、例のノイズが耳をつんざく。
リンは自分のノイズに肩をすくめ、歌を止めてしまった。

「リン、辛いのは分かるけど、我慢してくれ。いつもと同じように歌うんだ」

少し強めの語気で剣持は言った。愛情のある厳しさだった。
ひとつ深呼吸をしてから、リンはまた歌った。

喋っている時とは比較にならない音量のノイズが走る。
汗を浮かべ、辛そうに歌うリン。
ミクは胸が締め付けられるようだったが、目を背けずに見守っていた。
剣持はひたすらモニターを睨みつけている。
目まぐるしく動く波形に、ときおり鋭いノイズの腺が現れる――。

リンは一曲を通して歌った。
それだけでひどく疲れた顔をしている。
ミクも見ているだけで参ってしまった。
剣持は相変わらずモニターとにらめっこして、記録した波形を拡大・縮小したり引き伸ばしたりしていた。
欲しい情報が得られたのか、しばらくすると手を止めて、防音室につながっているマイクからリンに声をかけた。

「リン、こっちに来てくれる？」

原因を調べるためとはいえ、耐え難い責め苦から開放されたリンが深い溜息をつく。
ミクが防音室の扉に駆け寄った。
ドアを開けて出てきたリンは、散々自分のノイズを聞かされたためか、憔悴しきっていた。

「リン、大丈夫……」

リンが小さく頷く。ミクは手を引いて剣持のそばへ連れて行った。
テーブルを挟まず、剣持の前に置かれたオフィスチェアに座らせる。
ミクは医師の診察の付き添いのように、リンの後ろに立っている。

「リン、苦しいのによく頑張ったね」

剣持がまずはねぎらいの言葉をかける。

「思い出してほしいんだけど、リンは最近、感電したとか電化製品が漏電してたとか、そういう電気に関わるトラブルが身近でなかった？」

リンは顎に手を当ててしばらく考えたが、横に首を振った。

「剣持さん、雷とかも入ります？」

「雷？　いつ？」

ミクの言葉に剣持が食いつく。

「昨夜です。十二時過ぎくらいから近くに雷がいくつも落ちて、リンが、すごくそれを怖がって…」

リンがベッドに潜り込んできたことは言わないでおいた。

「リン、雷が落ちてる時、ヘッドセットつけたまま充電したりしてなかった？」

リンが頷く。ミクはちょっと怒った顔になる。

充電中なのを忘れて歩いたりするとコードを引っ張ってしまうから、そういう行儀の悪いことをするなといつも言っているのだ。

「充電しジッ…たまま、寝ちゃって…そジッ…のうち雷が…」

背後に怒りの気配を感じるのか、リンは後ろを向こうとしない。

「原因はそれだろうね。君たちのヘッドセットは、頭の中のプロセッサーとメモリーにアクセスするためのゲートウェイでもあるから。コンセントから入った過電流がヘッドセットを通じてプログラムにバグを生じさせたんだろう。それなら大体僕の予想通りだ。すぐに直せるよ」

――すぐに直せる――救いの言葉が、二人の耳にこだまする。
ミクがほ～っとものすごく長い息を吐いた。

「よ、良かった～！　剣持さんのこと信じてたけど、なかなか言ってくれないんだもの、そのひとこと。良かったね～、リン」

ミクは身をかがめてリンとおでこを合わせた。
リンもホッとして、久し振りに笑みが浮かんでいる。

「そりゃ確証がもてるまでは言わないさ。さて、リンはアクセスルームに移動、ミクは休憩室で待っててくれるかな」

アクセスルームはボーカロイドの内部コンピュータにアクセスするための部屋だ。
開発ルームの隣にある。

「あたし、ここで待ってます。一人の方がいいから…」

「そう。じゃあ、茶菓子くらいは持ってこさせるから、待っててね。二、三時間で済むと思うよ」

アクセスルームの前で剣持にリンを託し、ミクは開発ルームに引き返した。

女性社員が茶菓子と飲み物を持って来てくれたが、喉を通らないし何も手に付かない。
手術室の前で家族の手術が終わるのを待つ心境だった。

☆

アクセスルームのカプセルの中で、リンは静かに目を覚ました。
圧縮空気の抜ける音がして、カプセルの蓋がゆっくりと開いてく。
アクセス中の眠りはとても深い。
リンは少しボーっとしていたが、横を向くとコンソールを操作する剣持の横顔が目に入り、ヤマハに来ているのだと思い出した。

「あ、起きた？　リン。ヘッドセット外して起き上がってごらん」

コードがいっぱいついたアクセス用のヘッドセットを外す。
身体がギクシャクしている感じがするので、そろそろと身を起こす。

「どう、気分は？」

「…何か、お昼寝し過ぎたみないな感じ…アレ？　ノイズ…、あ！　ノイズない！　あたし、喋れてる！！」

ノイズが消えているのに気付いた途端、急に元気になる。

「会話は問題ないみたいだね。次は歌ってごらん、さっきの歌」

開発ルームで歌った歌を、もう一度歌う。
最初はこわごわと小さな声で、ノイズが出ないのを確かめながら、だんだん声を大きくする。
曲の中盤を過ぎた辺りからは、嬉しくなってシーケンスよりも大き

な声量で歌った。
一曲を歌いきっても、ノイズはまったく出なかった。
「わーい！　直った！　剣持さん、ありがとー！！」
リンは勝手に別の曲を歌いだした。
腰掛けていたカプセルから飛び降り、手振りを加えて歌う。
しまいに調子に乗って、踊りながら歌いだした。
剣持は楽しそうにそれを見ている。
「よし、大丈夫そうだね。早くミクにも聴かせてあげなきゃ。開発ルームに行こう」
「あ！　ちょ、ちょっと待ってください！」
楽しげに歌っていたリンが、隣室に行こうとする剣持を慌てて呼び止めた。
「何？」
「あの、教えてほしいことがあるんです…」
急に真顔になるリン。大事な話らしいと思い、剣持はイスに座りなおした。
「教えてほしいことって？」
「…ひょっとして、ミク姉、以前声にノイズが出たこと、あるんじゃないですか…？」

剣持がちょっと目を細めた。

「どうしてそう思うの？」

「だってミク姉、剣持さんなら直せるって、すっごい自信持ってたし、実際剣持さんあっさりあたしのこと直しちゃうし、静岡に来るのだって、ミク姉やたら手はずが良かったし…」

剣持は頬をポリポリと掻いた。

「うーん、誤魔化しようがないな、こりゃ。リンは勘がいいって聞いてたけど…」

「やっぱり、あるんですね」

「ミクには口止めされてるんだけど、まあ、今回でリンも当事者だし、話すことにするよ。二年前のことだけどね…」

☆

二年前、札幌市内のとあるPさんの家で歌を録音しているとき、ミクは漏電したアンプで感電した。
ちょっとビリッとした程度だったが、直後にミクは声にノイズが混ざるようになった。
うろたえるPさんに心配をかけまいと、「クリプトンに行けばすぐ直ります」と言って、その足でミクはクリプトンに向かった。
楽天家のミクは、本当にすぐ直ると思っていたのだが、実際クリプトンでは手に負えなかった。
ボーカロイドのコア技術に関わるエラーで、ヤマハでなければ調べることもできないと言われた。

ここでようやくミクは危機感を覚えた。
クリプトンの社員に付き添われ、ミクは静岡へ飛んだ。
道中、ミクは青い顔をして一言も喋らなかったという。
ルカやリン、レンには、心配をかけないように「アップデートの件で剣持さんに呼ばれた。ついでに静岡で遊んでくる」とメールで連絡した。

「…あった、二年前…ミク姉、静岡に行くって言ったっきり一週間も帰ってこなくて…アクセスルームに入ってるから連絡しないでって…あたし達、剣持さんとこだから、何も心配要らないと思って…」

「ミクの時はね、今日みたいにすんなりとはいかなかったんだよ」

開発ルームで剣持に会うと、ミクは泣き崩れた。
あたしを直して、歌えなくなるなんて嫌、と彼女は叫んだ。
剣持たち開発スタッフは懸命にプログラムのエラーを探した。
しかし、手がかりもつかめないまま三日間が過ぎた。
剣持はカプセルを開けてミクを起こし、状況を説明した。
三日間懸命に調査しているが、未だ解決の糸口すらつかめていないこと、もう少し粘ってみるが、それでも原因がつかめない場合は、再インストールしか手がないこと。
再インストールした場合、生まれてから今までのミクの記憶はなくなってしまうこと――。
ミクは再びカプセルで眠った。
剣持たちの必死の調査により、運び込まれて六日目にエラーが見つかった。
それはとても小さなルーチンで、こんな瑣末なプログラムのエラーがこんなに大きな影響を与えるのかと、スタッフ全員が驚くほどだった。まさに盲点だった。

「リンのエラーがすぐ直せたのは、ミクの時の修正プログラムができていたからなんだ。近いうちレンとルカも静岡に呼んでアップデートしようと思っていたところなんだよ。アップデートでは、ノイズを発生させるルーチンを冗長化してバイパスを作るから、今後絶対に同じエラーは発生しない」

剣持は自信を持って宣言した。

「そんなことがあったんですか…。大変だったんですね。剣持さん、ミク姉を助けてくれて、ありがとうございました」

頭を下げるリン。剣持は頭を掻いた。

「礼はミクに言いなよ。…三日目に起こして状況説明して、その後またカプセルに入る時、ミクが何て言ったと思う？」

リンは首を振った。

「俺の眼をじっと見てさ、『もし、あたしが歌を歌えなくなっても、再インストールはしないで。あたしの大切な人たちを忘れたくないの…』って言うんだよ。あのミクがだよ。あいつから歌取ったら、何が残んだよ。それでもいいってさ」

その時のことを思い出したのか、剣持の眼が潤んでいる。

リンは胸を打たれた。飛行機でのミクの言葉を思い出す。

――あなたは、何より大切な、あたしの妹よ――

「俺さ、それ聞いたら泣けてきちゃって。ここでミクを直せなかったら何がボカロの父だって意地になってさ。三日三晩徹夜でエラー

探したよ。あの時のミクの言葉がなかったら、絶対にエラーは見つかってないし、今日のリンだって直ってないよ。ミクに助けられたようなもんだ」

リンの眼に、ぶわっと涙が浮かんだ。

「あ、あたし、全然敵わないのに、ミク姉のことライバルだと思って…いつも突っかかって、喧嘩ばっかりしてたのに…ミク姉はあたしたちのこと、そんなに…」

手で顔を覆い、泣きじゃくる。指の間からぽろぽろと涙の粒がこぼれた。

剣持が手を伸ばして、リンの背を優しく擦る。

「ボーカロイドも今は人数が増えたけど、何でミクだけが飛び抜けて売れてるんだろうって、ずっと考えてたんだ。あの時、その訳が分かった気がしたよ」

リンは声をあげて泣き続けた。

剣持はリンが泣きやむまで、赤ん坊をあやすように背を叩いてやった。

☆

剣持が開発ルームのドアを開けると、ミクはイスから飛び上がるように立ち上がった。

二、三時間と言ったのが、リンが泣きだしたこともあって三時間半になってしまった。

ミクはさぞ気を揉んだことだろう。

本当に何も手に付かなかったらしく、雑誌を読むとかした形跡が何

もない。

「剣持さん、リンは！？」

「大丈夫だよ、キレイに直りました」

「そう、良かった～。もう、遅いから心配しちゃったじゃない！
リンはどこ？」

剣持に背に隠れていたリンが、おずおずと顔を出す。目が真っ赤だ。

「…ミク姉、ごめんなさい…」

「あ、リン。良かったね～、直って。ごめんなさいって、何？」

「…飛行機の中で、人ごとと思って、とか言っちゃって…」

「忘れてたわよ、そんなの。あなた柄にもなく殊勝なことを…」

ここまで言ってやっとミクはリンの眼が真っ赤なのに気付いた。

「何？　リン、眼が真っ赤じゃ……あー、剣持さん、喋ったわね」

剣持が片手で拝んで謝る。

「ゴメン、ゴメン。でもいいじゃん、リンも当事者なんだし、知ってた方がいいよ」

「一人でテンパってたなんてカッコ悪いじゃない。ずっと秘密にしようと思ってたのに」

ミクがふくれる。

「怒んなよ、晩飯奢るからさ。リンはあんまり静岡来たことないだろ。名物でも食ってくか？」

そう言われて、二人ともすごく腹が減っているのに気が付いた。移動するのに手一杯で、昼食らしい昼食を食べていない。時計を見ると、もう八時を過ぎている。

「やった！　剣持さん、太っ腹、素敵！」

現金にミクが喜ぶ。

「ここの名物っていうと、富士見焼きそばと餃子、海の幸だと寿司とか海鮮丼だけど、何がいい？」

「あ、あたし、富士見焼きそばがいい」

リンがリクエストすると、ミクは慌てて耳元で囁いた。

「ちょっと、リン、せっかく奢ってくれるんだからお寿司かせめて海鮮丼にしなさいよ。焼きそばなんてせいぜい六百円よ」

「お寿司も海鮮丼も小樽の方が美味しいもん。富士見焼きそば食べたことない。あたし絶対焼きそば」

「まあまあ。ミク、今日はリンが主役だから、聞いてやりなよ」

「まったく、殊勝だったのは一瞬だけね。いいわよ、富士見焼きそ

ば美味しいし」

すっかりのんきな雰囲気になったところへ、ドアをノックする音がした。

顔を出したのはボーカロイド開発スタッフの若い男性だった。

「剣持さん、リン直りました…？」

「直ったよ、みんな来てんの？」

直ったと聞くと、後ろから続々と社員が部屋に入ってきた。

みんな心配で見に来たらしい。

「良かったねー、リン」

「わ、ミクもいる！」

「本物だー、超可愛いー！」

ファンに囲まれた状態になってしまった。みんなボーカロイドが好きなのだ。

「リン、ミク、せっかくだから、みんなに歌聞かせてあげてよ」

剣持が頼むと、ミクとリンはすぐにオーケーした。室内に歓声が上がる。

「ここ、オケ流れるの？」

「何でもあるよ。どの曲にする？」

リンがミクとのデュエット曲の曲名を言った。

即座に若いスタッフがコンソールを操作する。
曲が流れ、ミクとリンが歌い踊る。
思いかけず始まったミニライブに、ヤマハの社員は沸き立った。
予想外に盛り上がってしまい、結局ミクとリンはデュエット三曲にソロ四曲を歌い、富士見焼きそばはさらに三十分遅れになったのだった。

☆

札幌市内のコンサート会場。三千ある観客席は、二階まできっちり埋まっている。
開演時刻が近づき、ホールの雰囲気は期待で張り詰めていた。
ミクたち四人は衣装に着替え、出番を待っている。
久し振りの大舞台なので、さすがにみんな緊張の面持ちだ。ミク以外は。

「リン、客席見に行こ」

ミクがリンを誘って舞台そでへ行く。
広いホールは隙間なく人で埋まり、うねるようにざわついていた。
大量の黄緑色のケミカルライトが、風になびく草原のように揺れている。

「いっぱいだねー、すごーい」

脳天気なミクの声。対してリンは、ミクの腕につかまり、緊張で震えていた。

「…ミク姉、緊張しないの？」

リンはプライドが高い分繊細なところがあり、こういうときは人一倍緊張してしまう。

「あたし、間違えないもん」

リンはあきれた。

「そりゃ、あたしたちシーケンスがあるから間違えたりはしないけどさ、そういう問題じゃないでしょ。どんだけ神経太いのよ」

「こんなにたくさん来てくれて、嬉しいね」

リンの突っ込みは意に介さず、ミクはにっこりと笑った。心から楽しんでいる笑顔だった。

「ミクさーん、そろそろ出番です。リフトに移動してくださーい」

スタッフに呼ばれ、ミクはリフトに向かった。

リンの出番は中盤からだ。

リンはリフトで上がるところを見送ろうと思って、ついて行った。

舞台下に続く階段を降りている間に、最初の曲が流れ始めた。

続いてファンの歓声が響いてくる。

一曲目は本人抜きで、録音された歌が流れる。

期待が最高潮に高まったところで、二曲目からミクの登場、そういう演出だ。

半畳ほどのリフトにミクが立つ。傍らで見守るリン。

「ミク姉、頑張ってね！」

「うん、リンもね。…あ、」

振り向いてリンに答えたミクが、何かに気付いてリフトから降りた。
リンのそばに歩み寄る。

「どうしたの！？　もう始まるよ、ミク姉！」

「髪留めずれてる」

手を伸ばし、前髪の髪留めを直してやる。
一瞬ポカンとしてしまったリンの目に、上昇を始めるリフトが飛び込んできた。
上ではすでに二曲目のイントロが流れている。

「ミ、ミク姉！　リフト動いてる！」

「おっと」

五十センチほど上がったリフトにミクは飛び乗った。
右手を振って笑顔を見せた後、前を向いてポーズを決める。
舞台にあいた四角い穴に、ミクの姿は吸い込まれていった。
歓声が沸き起こる。
会場を揺るがす熱狂的な声援が、舞台下までビリビリと響いてくる。
ミクが歌いだすと、歓声はますます大きくなった。
リンはミクが消えた舞台の床を見上げている。

「全然敵わないな……。まあいいや。目標は大きい方がいいもんね」

前髪の髪留めに手を触れる。
そんなはずはないのに、ミクのぬくもりが残っている気がした。
両手でパシパシと顔を叩いて気合を入れる。

リンはくるりと振り向いて、舞台から聞こえてくる曲を口ずさみながら、歩き出した。

おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5091ba/

【VOCALOID】リンが歌えなくなった日

2012年1月14日00時46分発行